

ゴーリキイの初期創作における 語り手の形象について

(自伝的主人公の問題 I)

松 本 忠 司

ゴーリキイの全創作において、作家の自伝的主人公の形象が占める比重はきわめて大きい。ゴーリキイ文学の最高の達成と思われる自伝小説三部作(『幼年時代』、『人々のなか』、『私の大学』)の主人公はもとより、作家の最初の作品からはじまって、その創作活動のほとんど全期間にわたって登場する一人称による主人公もまた、ゴーリキイの自伝的要素を濃厚に帯び、彼の創造と生活の発達過程の個々の段階を示す形象としてわれわれの関心をよび起すのである。この「私」なる人物の経歴と体験には作者の伝記的特徴が反映され、彼を通して事件が報告され、登場人物が紹介されその生活が意味づけられ、作者の思想がより直截に述べられる。しかし、この語り手の個性は、単に自伝的な意義をもっているばかりでなく、同時に芸術的な意義、つまり独立した一般化されたものとしての、形象としての意義を否定するものでない。ゴーリキイが作品に「私」をひき入れるのは、回想にふけるためではない、たとえば回想録の作者のように自分の生活を読者に紹介しようとするためではなく、作中の登場人物たちの発言や行動を通しては、決して与えることのできぬものを描くためであり、新しい人間のタイプを示すためである。ゴーリキイの作品が多くの場合、作品のなかで具体的に描かれている世界よりはるかに大きな世界をわれわれに感じさせるのは、語り手が諸々の形象を補足し、諸々の形象の背景を暗示するからでもある。そうした意味で、語り手としての自伝的主人公の形象は、芸術手法における独創的な、独自の

形象である。そしてこの形象は、作家の伝記的要素を外面的ばかりでなく、「内面的」にも照応する。主人公の精神的発達過程のなかには、とくに初期創作において、ゴーリキイの80年代～90年代の世界観形成過程の反映が直接的に流露されている。このような視点から語り手の意義を考察しようとするのが、本稿の課題である。

本稿は、今回において90年代創作を対象とし、次回において1917年を境界とする二つの自伝的系列「ルーンについて」および「インテリゲンツィヤのなかで」の構想における一連の作品をとり扱う予定である。

※

※

※

ゴーリキイの最も初期の創作に属する一連の短編小説において、語り手としての自伝的主人公は、漂泊の遍歴者として登場する。世帯道具のがらくたを詰めた雑嚢を肩にかけ、継ぎはぎのポロ服をまとい、長身で、やや猫背の、少々不愛想な顔付きをしたこの青年は、外見的特徴からいえば、遍歴の途次に彼が会うところの浮浪人たちの多くとさして異なるところがない。しかし、これらの浮浪人たちと異なり、語り手が遍歴の道を歩むのは、運命の気紛れや偶然の意志によってこの道へ掃きよせられたのではなく、彼自身の意識的選択による。ロシヤを知りたい、広大なロシヤの生活実態をつぶさに自分の眼で確かめたいという希求が、彼をしてこの道を選ばせた。そしてこの希求は、広大なロシヤのいずこかに存在するに違いない、灰色の、よどんだ奴隷的世界を改造するための「巨大な、積極的力」⁽¹⁾（I, 479）を発見し、そうした力を自分のなかに吸収して育くもうという意図とかたく結び付いている。このように、その最初から、語り手は生活の単なる観察者としてではなく、知識慾の旺盛な、目的意識的な生活の探求者として登場する。こ

(1) М. Горький, Собрание сочинений в 30-ти томах, Москва, 1948~55, т. 1, с. 407. (以下、同選集からの引用は引用文の末尾に巻数と頁を記入する。)

のことが、その外見的近似性にもかかわらず、語り手を周囲の人々からきわ立たせ、ある大きな、独自の印象をよび起すのである。しかし、彼もまた奴隷の世界で生い育ち、この世界に深く根をおろす先入見からまだ完全には自由でありえない。語り手自身がこれを意識し、これと闘ってきた。そして、改めて「自己を発見する」ために、「人々のなか」をめぐり歩くのである。

語り手が出会うのはどのような人々か。「人々のなか」で彼は何を見、知るか。以下、語り手の行程を眺めてみよう。

処女作『マカール・チュードラ』(1892)において、語り手はジプシーの老人と、その娘の美しいノンカを知る。ジプシーたちの歌う古謡を聞き、彼らの見聞に注意をこめて耳を傾けながら、語り手は、ジプシーの語る物語の内容に対する独自の結論と見解を自分のもとに留保している。多くの点で語り手の見解はマカールの見解に対立する。彼は老ジプシーのペシミズムを受入れることはできないし、彼の遍歴は「生活のための気苦勞」を怖れたり、自分の憂愁を旅の空で吹き消すためでもない。だから、「歩いて、見て、とっくり見たら、横になって死ぬだよ——それまでよ！」(I, 9)というマカールの言葉に彼は反対しなければならない。「おたがいに習ったり、教えたりする」、つまり、生活の本当の意味を知るために人々が互いに助け合い、なんのために生きるのか、どのように生きねばならぬかという問題に答えること——これが彼の遍歴の理由である。マカールは語り手の探求が成功するとは信じない。「おたがいに習ったり、教えたりすると、いうのかい？ だが、おまえは、人を幸福にする術を習うことができるかい？ いや、できやしねえよ」(I, 10)

つづく記録小説『エメリヤン・ピリヤーイ』(1893)では、作者は語り手をより広い場に連れ出し、この作品で初めてマクシムという固有名を語り手に与えている。彼は別の社会層のなかにあり、彼の話し相手は浮浪人ピリヤーイである。以前と同様、マクシムが所有するものは、自分の労働に耐える両手のほかには何もない。商港オデッサで仕事を見つけることに望みを断

たれた彼は、エメリヤンとともに、「製塩所」に行くことを決心する。エメリヤンは、「製塩所」の労働の懲役に等しい性格について、苛酷な労働の搾取について、こう説明する。「俺たちはまず塩場の支配人の旦那のそこへ行って、できるだけうやうやしくこう言わなきゃなんねえ——『お情けぶかい旦那さま、尊敬すべき掻っばらいの吸血鬼さま、わしらはこのとおり、このわしらの生皮を引っぺがしていただくために、ここにやってまいりやした。一昼夜60カペイカで、こいつを剥いていただくわけにゃいかねえでござやしょうか!』」となあ。それから、そのあとは……」(I, 87)

マクシムは、もっと安易な世渡りを望むピリヤーイの提案を斥ける。彼は重労働を怖れず、むしろ進んで自分を錬磨する機会を選ぼうとする。環境に対する彼の見解の明るさは彼にとって生来的なものである。しかし、エメリヤンは、マクシムのオプチズムが「書物的」性格を帯び、まだ実生活の諸原理によって検証されたものでないことを正確に知覚し、その点で仲間を非難するのである。二人の見解の最初の衝突は、百姓に関する対話において生ずる。マクシムは貧困な、凶作に苦しむロシヤの農民を、エメリヤンの攻撃から防禦することに成功した。彼は「凶作がない」「よその国」の農民の生活についても説明することができる。しかし、ロシヤの百姓に重苦しい生活からの出口を示してやることは、彼にはできない。第二の衝突は、対人関係における同情と残酷の権利に関する意見の対立である。「誰だって他人の生命を犠牲にして幸福になる権利はない」(I, 90)と、断乎として主張するマクシムに対し、エメリヤンは冷笑によって応じ、生活自体が創り出しているもののすべてが、いかにマクシムの確信に矛盾するかを示し、独特の言いまわしで、搾取的社会の基本的な「権利」を明らかにする。「《権利さ! これこそ権利というもんだよ!》私の鼻さきに、エメリヤンの威圧的な、ごつごつした拳が突きだされた。《誰だってみんな——ただ方法がちがうだけで、いつもこの権利に従がって暮らしているんだ。やっぱり、この権利さあ!……》」(前同)

生活のすべてが人間を窮地に追いこみ、彼のなかに増しみの感情を揺すぶり起し、彼を死の脅威によって襲うならば、人間はどのような手段によっても、自分を護る権利があるのか？——エメリヤンは、然り、と答える。こうした類の問答において、マクシムの対話者から与えられる回答の多くは、浮浪人のもとでも、農民や半失業的な渡り労働者たちのもとでも、同じように宿命的に暗く、絶望的に陰惨である。そして、人々を支配するペシミズムは、生活の単調と倦怠から、人々の心のなかに他人の不幸を喜び期待する悪意を育てる。こうした悪意を、マクシムは文字どおり自分の肌で体験しなければならなかった。短編小説『塩の上で』(1893)において、製塩所で働く語り手は、塩を満載した手押一輪車に手をかけたとき、労働者仲間の誰かが故意に、斧で刻みつけ、とげ立たせた把手のために掌の皮を擦りむく。激痛に耐えかねる彼に対して、嘲笑が襲いかかる。「喊声、哄笑、口笛が四方八方から私の顔をめがけて、飛びかかってきた。到るところに、憎々しげな、勝ち誇ったしたり顔を私は見た。石積み場から石工の嘲けるような罵声、飛んできたが、誰ひとりそれには注意を向けなかった——みんなが私のことにかかりきっていた」(I, 106) 以前の作品でエメリヤン・ピリヤイが語ったよりも、はるかに苛酷な重労働に耐え、その生活感覚からすれば語り手にとって親近な人々との出会いは、この人々を幸福な人々として見ようとする語り手の期待がどんなに強かろうとも、それは大きな苦痛をよび起すものでしかないことを語り手に示した。

マクシムが辿る「生活学校課程」の最も暗い部分である浮浪人「哲学」を、全面的かつ典型的に明らかにするのは記録小説『二人の浮浪人』(1894)である。

マクシムがマースロフとスチエパンを初めて見たのは、セヴァストーポリの土木請負師のもとへ、仕事を頼みに行ったときであった。二人の存在は、その向うみずの横柄さによって、「ロシアから来た饑えた連中」——凶作に追いたてられ、すぐにも「他人の意思に服従する」(I, 391) 用意のある、

悲しげな表情の人々のあいだで、ひときわ目立っていた。仕事にあぶれたことから、語り手はこの浮浪人たちと知己になり、パンを、銭を分け合う仲になった。彼は新しい知人たちの言葉の一つひとつに興味をそそられて、彼らに注意を向け、彼らと熱心に論争し、多くのことを学び取り、自分でも教えようとする。

マースロフは無口だが、スチョーポクの方は能弁で、マクシムにたえまなく論争をもちかけ、この論争を通じて二人の世界観の対立が明らかにされる。すこし黙らないかというマースロフの言葉に、かえって火に油をそそがれた態のスチョーポクは言う。「俺が悪いことでもしゃべったかい？ なんにもさ。このマクシムはほざくんだ……人間は自分の心を大事にしなきゃならねえ、とな……つまり、仕込むんだとよ……それがどうなんだ？ だが、俺は言うんだ——人間にはそんなことはどうでもいい。人間は羽根みたいなもんだ。風が吹く方へ飛んでゆく。それでどうなるって？ どうもこうもねえ——なんでもかんでも唾ひっかけろ！ くよくよしねえで、陽気に飛び廻るに越したことはねえ。何をくよくよ考えることがある？ どう生きよう——くたばるのさ。しかも、くたばるのがいつかは、わかりやしねえ——今すぐかも知れねえ、明日かも知れねえ。お役所だってそいつをおまえに知らせちゃくれまいて」(I, 398)

マクシムはスチョーポクの見解には同意しないが、しかし、スチョーポクのような人々に別の考え方はできないことを理解している。彼らは「滅亡を運命づけられた人々」だ。スチョーポクとマースロフが曠野を行きながら歌をうたうとき、その歌声はマクシムの心をしめつけ、「滅びかけている者の姿を、その望みなき愁訴と呻吟とを、消えかけるエネルギーの最後の燃焼を」彷彿たらしめる。彼はマースロフの顔をじっと見つめて、感じた。「彼(マースロフ)はこの一時のあいだに、自分の憂愁を声のかぎり歌って、ほとんど自分のための供養をしているのだった」(I, 400)

2度目にマクシムがマースロフとスチョーポクに出会ったのは、彼がクバ

ンのコザック村で、富農の打穀場で働いていたときである。マースロフも打穀場に雇われることになったが、まもなく、彼の驚嘆すべき労働能力についての噂が近隣の村々にひびき渡った。浮浪人がかくも労働に熱中する原因に、マクシムは関心を抱く。マースロフの熱情は、機械に対する極端な憎悪によって、機械を「黙らせる」という願望によって喚起されたもののように見える。彼の機械に対する憎悪は、彼がトマーシェヴォの織物工場で働いたとき以来のものである。マースロフはこう回想する。「ぐるりと回って、クルクル転がり、ボタンボタンと音をたてて……そして、なんでも自分でやってしまう。ところが、人間はそいつのそばであっけらかんとしてやがる……こっ恥じかしいわな！ほんのちょいと——ジー！ボタン！それで一丁あがりとくる！人間がいたのに、切れっぱしだけが残った……俺はそいつを、いやというほど見たぜ！……そしてな、肝心なことは、そいつのおかげで、こちとらまで獣になっちまうということさ！」(I, 404)

やがて、マースロフ自身が、人間を「切れっぱし」に変える機械の暴力に襲われる。打穀機のシリンダーに捲きこまれて、彼は脱疽になり、死んだ。

それから一年たって、語り手はアストラハンの街頭で、偶然スチャーポクに出会う。マクシムはすでに以前の放浪の青年ではなくて、頭から足のさきまで、何もかも新調づくめの、「きわめて文化的なスタイル」で、黒眼鏡をかけた紳士である。最初のうち、スチャーポクは奇遇を単純によるこぶが、やがて彼はマクシムを冷笑のなかに侮辱、憎悪をこめて見つめはじめた。かつての道づれが何のために、どういう理由で彼に敵意を示すのか、マクシムには理解できない。居酒屋での二人の対話は興味ぶかい。「どうやって金持になったか」というスチャーポクの問いに語り手が答えたとき、相手は憤然として彼に非難を浴びせる。

「《なゝーる！……つまり……なんだな？ おめえは心底からの浮浪人じゃなかった……つまり、好奇心というわけだな？……》《まあ、そうだが……》《おめえという奴は？ やっぱり好奇心か。で、今はもとへ帰った

……気に入らなかったのか？ うまいことやりやがる！」《わたしはもっと歩いてみたいよ……》《ふーん……わかんねえな……するてえと、おまえはただ……歩き廻ってみて、そしてそれだけかい？……》《そりゃ、どういうことだね？》《いや、別にどうってことはねえ……俺はつまり……》彼は口髭をひねった。《なんという^{あて}目的もなしに、つまり……歩いてみて、家に帰るといわけけ？ 暖炉のそばによ？……》《いや、目的はあった。知りたかったのだよ、人間てどういうものか……》《なんのためにだ？》《知るためにだよ》《そうかねえ！……ほかには何にもないのか？ ただ見て、それで終りかい？》《書くということもあるね……新聞に》」（Ⅰ，415）マクシムが彼らの生活を、「人々に知らせるために」書くつもりでいると知って、スチョーポクの憤激は極みに達する。「そ、そいつはとんでもねえ卑劣だ！」と叫んで、彼は別れも告げずに、表へ飛び出す。そして、窓越しにマクシムに訊ねる。「《ところで、おめえ、好奇心から汚水溜にとびこんでみねえか？ え？》《いや》《惜しいな！……俺がおめえに手伝ってやるのに！ 一番深いところへ突っこんでやったのに！》」（Ⅰ，416）

スチョーポクの不可解な行為と憤激の言葉は、マクシムの心を深部において揺すぶった。彼はひとりテーブルに残って、浮浪人がなぜ彼を非難したのか、その非難は正しいのかどうなのかと沈思する。

語り手が以前に知っていた人々は、灰色の生活の重圧に押しひしげられ、その人間的なすべてを削り取られつつ、それでもなお、今よりは良い生活を期待し希求する気持を失ってはいなかった。そして、この気持が人々を突き動かして、時には、人間を押しつぶす力への抗議となって燃えたたすこともあった。しかし、個々の人々によって表現される孤立的、散発的な闘いは、乞食のリョーリャや不幸なパーヴェルのようなゴーリキイの主人公たちの運命において見るように、常に一方的に、抗議する個性の敗北によって終るのであった。だが敗北したとはいえ、人々のなかに、善と光明を希求し、悪を憎み不正に抗議する力が完全には死滅していないのなら、それに正しい方向

を示さなければならぬ——これがゴーリキイの語り手の基本的課題であり、これに回答を見出すために、広大なロシアを彼は放浪の旅を歩まねばならぬのだ……。しかし、放浪の途次に出会う人々はちがっていた。スチョーポクは、放浪こそが生の目的であると断言する。ボロをゆすぶりながら、一片のパンと一杯のウオットカ代のほかは何ひとつ欲しないと、彼はうそぶくのである。浮浪人——それは *босяк* (跣足の人)、*бродяга* (さまよい歩く人)、*шату́н* (ぶらぶらする人)、*оборванец* (ボロをまとった人)、*золоторотец* (すべてをかつさらう者) とよばれ、*бывшие люди* (かつて人間であった人々)、*люди обреченные* (破滅に運命づけられた人々) と特徴づけられる。かつてそこに生きた社会生活の場から浮浪生活へとすべり落ちたと同時に、彼らのうちなる人間的なもののすべてが、その最後の閃光さえも消えてしまったのだろうか？ それならば、どうして、彼らは人間の個性を奪い、同一の従順な家畜に変えようとする不正な社会生活の秩序をかくも軽蔑し、秩序の束縛の外にあることを誇り、そして自分の苦難については毅然として沈黙を守ることができるのか？ マースロフとスチョーポクは、自分の状態に対する不満も苦情も訴えないし、マクシムの願望の実現のために役立つ何ものも与えない。それどころか、マクシムの悲願の実現が無意味であることを証明して、彼の確信を突きくずそうとするかに見える。スチョーポクの言葉を信ずるならば、人々はたしかに不幸ではあるけれど、幸福になることを望んでいないのだ。そうであるならば、マクシムは遍歴によって何をすることができるのか。

『わたしの道づれ』(1894) は、語り手の遍歴における一つの転機を示し、語り手が懐いていた人々について、その幸福に関する見解についての観念における重要な修正を物語るものとして興味ぶかい。

オデッサの港湾で働いていたとき、マクシムは、グルジャ公爵を自称するシャクロ・プターゼと知り合う。異境の空の下で、不幸な境遇に落ち込んだシャクロに同情して、彼を故郷のチフリスまで送りどけることをマクシム

は決心した。しかし、マクシムの善意は裏切られ、彼はシャクロのためにほとんど身ぐるみ剥がされた上、異境の空の下にひとり置きざりにされる。

《サマーラ新聞》に発表された短編の初版では、ゴーリキイはこの物語を次のようにむすんだ。「そして今、あらゆる人に心からおすすめしよう。彼のような、このシャクロ公爵のような堅固な魂をもった存在と2～3カ月ほど、ぴったり寄り添って、すごしてごらん下さい、と。心からおすすめしますよ、それはとても教訓的だから！」⁽²⁾

1899年、作品集『記録小説と短編』第3巻にこの短編を入れるさい、ゴーリキイは物語のむすびを一層アイロニーの濃厚な、一層意味深い言葉に改めた。

「私はそれ以来、この男に——私のほとんど4カ月にわたる生活の道づれに一度も出会わなかった。だが私はしばしば彼のことを、なつかしい感じと朗らかな笑いをもって思い出す。

彼は私に多くのことを教えてくれた。それらは賢者たちの部厚な書物のなかでも決して見出すことのできないものである。なぜなら、生活の知恵はいつも人々の知恵よりも深く、かつ広いからだ」(I, 446, 傍点筆者)

この作者による改訂文は、語り手の形象を解明するためにきわめて重要な意味をもつと考えられる。この短い言葉のなかに、抽象的な警句の外見の蔭に、語り手のこれまでの精神発達の全行程と、きわめて現実的かつ具体的な、社会的歴史的内容が秘められている。

80年代～90年代初頭のロシアの時代的性格を一言で規定するとすれば、ブルジョア・デモクラシーの革命性はすでに死に瀕していて、一方、社会主義的プロレタリアートの革命性はまだ揺籃のうちにあった。80年代ロシアの重苦しい社会的雰囲気は、アレクサンドル2世暗殺を契機として始められた支配上層の側からの苛酷な政治反動によってばかりではなく、大きな程度にお

(2) « Самарская газета » № 267, 31 декабря. В кн. И. Груздева « Горький и его время ». М. 1962.

いて、70年代人の理性と良心の旗幟であった人民主義思想の革命性の喪失、衰頹、変質、そして自由主義的再生によって、さらにまた、さまざまな色調の差異があるにせよ結局は既存体制との和解（より正確には——屈服）へと導く新しい理論・教義（トルストイ主義，《小さい事業》の理論）の出現によって、いっそう濃厚に形成された。

『私の大学』、『コロレンコ時代』など、1920年代に書かれた一連の回想的文学のなかで、ゴーリキイは、80年代インテリゲンツィヤの思想的凋落の特質を鮮明に浮彫りした。若きゴーリキイにとって、人民と知識層の断層の深化が、一時的にせよ、彼をして生の絶望へと駆りたてたほど深刻かつ劇的な衝撃であったことは注目しなければならない。それは人民の事業に公然と背を向けた人々ばかりでなく、生活を遊離し、ユートピア的書齋的信仰の世界に逃避した、それはそれなりに、主観的には、誠実であり良心的でもあった同時代の知識人たちの連帯責任でもあった。人民の実態を知らぬ「人民愛好者」、「眼鏡や鼻眼鏡をかけ、ズボンと長靴の上に穿き、種々様々の上衣を着て、書物から借りてきた言葉の単調に斑らなマントをつけたこれらの近視眼の読書人たち」(XV, 81)の行状の悲喜劇的光景は、とりわけゴーリキイの心を圧迫したのであった。

しかし、社会的沈滞期といわれる、ほかならぬこの80年代に、やがて90年代において巨大な奔流となって激動する解放運動の新段階——《大衆自身の運動》の端緒を意味する、隠れた変革が始まっている。発生したばかりの、まだ社会生活の表面には浮かび上がらなかった変革の諸過程を、先進的な同時代人は、まだ社会的本質として把握することはできなかったが、現在のなかに未来の萌芽を見、生活刷新の「嵐」の接近と不可避性を意識することができた。ロシア・インテリゲンツィヤの悲劇を最も完璧に映しだしたチェーホフの創作において、生活更新の主題は、年とともに、静から動へ、予感から未来像へと発展しながら、執拗に、きびしく繰返された。80年代から90年代初頭にかけて、「限りなく明るい未来」の前進の予見はシエルグーノフの

社会評論のなかに力強くひびき、『ロシア生活概観』のむすびの言葉は、「80年代人」の変質した世代のために臨終の祈禱歌をうたう時がきた、と宣言する。

若きゴーリキイにおいて、こうした時代特徴はまず第一に、作家のロマンチック伝説に反映された。しかし、新しきものの特徴は作家の初期創作においてロマンチック形式ばかりでなく、語り手としての自伝的主人公の具体的な、リアリスチックな形象において映し出された。語り手の生活探求の内的過程の各々の段階は、知識人集団による人民主義運動から「大衆自身の運動」への移行を準備する、この時代のロシア社会生活における根本的な変動を間接的に反映するものであった。ゴーリキイの主人公の生活行程は、明らかな個人的独自性を有しながらも、その主要な傾向性において歴史の進行そのものを反映している。「驚嘆すべくすばらしい」未来を夢想するチエーホフの主人公たちが、未来に対する作家の一般的理念を反映しているとすれば、ゴーリキイのマクシムとその生活行程のなかには、生活自体の客観的变化が肉づけられているといえよう。マクシム自身がこの変化の進行過程の一部なのである。

しかし、マクシムの活動にはいちぢるしい内的矛盾が存在する。彼の崇高な課題の実現にとって障害となるのは、生活の重圧と人々の無知ばかりでなく、人々の知性を啓発しようとする、ほかならぬマクシム自身の知性でもあるのだ。彼の知性には作りものめいた、非現実的な、空想的なものの痕跡があらわであり、生きた現実はずたえず彼の博識を嘲笑する。「学者にしてパリサイの徒」——語り手について作中人物の一人は冗談にそう言った(『コノヴァーロフ』)。「そういったことゝ本のなかにちゃんと書いてあらゝ」——こう言って、エメリヤン・ピリヤーイは語り手の発言を一蹴しようとする。生活実態の理解に浅い読書人の多くに共通するところの、すべて問題の解答を印刷物のなかにのみ求めようとする傾向——それを仮りに「活字崇拜」と名付けよう、——この傾向は、程度のちがいはあるにせよ、ゴーリキイの主人公の

性格の一側面として特徴づけられている。「活字崇拜」は主人公の外面的特徴の描写にも示されている。背が高く、痩せて、すこし動作の鈍いこの青年は、「^{なり}服装は兵隊だが、面付は学生」(『コノヴァーロフ』)であり、彼の背にかかる雑囊には、世帯道具と並んで幾冊かの本が入っている(『エメリヤン・ピリヤーイ』、『塩の上で』、『二人の浮浪人』)。しかも時には、周囲の人々から彼をきわ立たせ、初対面の人の眼には「なにか重みと威厳」を与えるものとして映るところの、眼鏡という読書人の悲しい附属品さえ、マクシムの特徴として示されている⁽³⁾(『エメリヤン・ピリヤーイ』)。「活字崇拜」の傾向は、個々の問題に対するマクシムの判断の仕方にも顕著にあらわれている。同行者たちとの論争において、多くの場合、語り手は正当かつ健全な見解を表明している。しかしこの見解は、正当ではあるにちがいないのだが、露骨に直線的な書物的形式をまとい、難解な用語と博識をひけらかす勿体ぶった言い廻しによって武装される。例えば、『コノヴァーロフ』の初版において、マクシムの啓蒙的話しぶりはこうである。「私は熱をこめて彼の生活を彼の前に描写してみせ、彼がこうであるのは彼の罪ではなく、彼は、ファクトとして、まったく論理的帰結であり、遠い過去からの長い一連の前提によって完全に正しく基礎づけられた⁽⁴⁾ということを立証しようとした」(傍点筆者)

マクシムの道づれの多くが彼に親しさを、愛情を、時には敬意さえ抱きながら、彼の見解を敵視し、彼を嘲笑する主な理由の一つは、マクシムの知恵や博識が「活字崇拜」によって支えられていて、現実生活の諸矛盾を正しく

(3) 青年時代のゴーリキイも眼鏡をかけていたようである。彼の風貌については、カザン警察署長の依頼を受けてチフリス憲兵隊本部が作成した1892年5月11日付の調書にこう記されている。「……ペシコフは数え年24才、非常に背がたかく、発達した人間で、きわめて美しい筆蹟を有し、眼鏡をかけ、髪は長い」(«Революционный путь Горького», по материалам департамента полиции, ГИХЛ, М.-Л. 1933, с. 29) しかしマクシムは作家の自画像ではない。彼の眼鏡については、エメリヤン・ピリヤーイが「四つ目のおばけ」と言っているように、語り手の読書人的性格を表現しているとするべきであろう。この性格の一般的特性については59頁の引用文を参照のこと。

(4) «Новое слово», год II, кн. 6, 1897, март, с. 15.

解明する人間（生きた生活）の英知に到達していないことを本能的に嗅ぎ分けていることによる。

『わたしの道づれ』において、マクシムは博学な賢者たちの教えを実行しようとする人間として登場する。人間はすべて——不幸によって結ばれた兄弟であり、みんなが善なる生活を渴望していて、そして一人ひとりが自分の力のすべてを捧げて、隣人の苦しみを取り除くべく努めなければならぬ——マクシムの愛読する書物はそう教えていた。しかし、この教義の生活における実践の第一歩を踏み出すが早いか、ある種の人々にとってはそのようなモラルが自分の寄生虫的生活の正当化の手段となっていることを、マクシムは知った。人間のなかには一般的幸福の敵も存在する——この事実を生活は、マクシムを公爵の末裔と衝突させることによって教えた。語り手はこう語る——「私はずっと働いてきたが、彼はたえず何かと口実をつけて仕事をことわり、ただ食って、寝て、私だけを仕事に追いたてた……私が仕事を終えて、疲れて帰ってくると、どこかの涼しい日蔭で私の帰りを待ち受けていた彼は、いかにも貧慾そうな眼でじろじろと私を見るのだった！ だが、それにもまして悲しく腹だたしかったのは、私が働いていると言って、彼が私を小馬鹿にすることであった」（I, 423）苦しい体験を通じて、マクシムは、ジャクロが彼の生涯の「道づれ」であること、すなわち、勤労する人間が自分の労働の結晶を、他人の横領と掠奪にまかして甘んじているという状況そのものによる不可避的な所産であることを理解する。ジャクロのごとき存在と、その「動物的エゴイズム」、「詐欺師の哲学」は、生活が人々に強制する苛酷な状況によってばかりでなく、マクシムのような誠実な人々の善意によっても生存の基盤を保証される現象なのである。ジャクロはその寄生虫的生活をみずからの意思によっては、決して変えようとはしない、痛烈な反撃によって彼が叩き伏せられないかぎり。一見、環境の創り出す諸悪の犠牲とも見える人々のなかにも寄生虫が、掠奪者が、搾取者が存在するのだ。かくて彼は身近に存在する敵を認識する。後年、ゴーリキイは、ジャクロの形象の

普遍的意義を特徴づけて、次のように書いた。「《公爵シャクロ》は——私の、あなたの、われわれの道づれです。私は彼のイデオログではなく、敵⁽⁵⁾なのです」自分の手近な敵の所在の確認は、マクシムを、「全人類」の名によって勤労人民の敵に対しても等しく寛容であれと説く博愛主義的ヒューマニズムを拒否して⁽⁶⁾、敵に対して徹底的な、非妥協的な闘争を押し進める戦闘的ヒューマニズムの道へ、「賢明な」「人々」の書物から借り集めて構成された「知恵」を乗り越えて、「生活の知恵」の真髓を見究める道へ進出させるのである。

しかし、このことは読書の一般的意義を否定しているのでも低めているのでもなく、ゴーリキイは、全人類史的遺産としての人間の理性発達の記録であるところの書物のなかに刻みこまれた英知が、生活によって日毎に、間断なく、新たに創り出されている諸現象の広汎にして正確な把握の上に初めて、その本来の、無限の力を発揮することを主張するのである。語り手と同じように、彼の先行者の一連の世代もまた「限りなく明るい未来」を求め、その実現のために闘いつづけてきた。しかし解放の理念は、現実の諸要求を十分に汲み取りえず、現実のなかにそれを支える基盤を見出すことなく、敗北に終わった、デカブリストやナロードニキの運動においてそうであったよう

(5) Жур. « Молодая гвардия », 1938, № 6, июнь, с. 55.

(6) 20世紀初頭のロシアおよびヨーロッパの批評界には、ゴーリキイをニーチェ流の「力の讚美者」と見る傾向と並んで、福音書的ヒューマニストと見る傾向があった。例えば、イヴァン・ストラニク (A. M. Аничковаの筆名) は、シャクロを「聖なる野獣」、マクシムをキリスト教的「使徒」と規定して、次のように述べている。「もう一人の浮浪人、疑いなくゴーリキイその人を思わせるところの人物は、小説の一つにおいて、隣人愛の最も高度な段階にまで到達する。ある港湾で彼は運命によってここへ投げ棄てられた不幸な存在を見出した。それは労働するにはあまりに怠惰で、嫌らしい事件のために彼が追い出された裕福な父親のもとへ帰る道を見出すためにはあまりに愚鈍な人間である。彼は自分に同情を惹きつけはせず、彼のなかには彼のために同情したり哀れを催させたりしうる何ものもない。しかしゴーリキイは、ただ彼に気に入っているという理由だけで、この男のために粉骨する……この奇妙な物語において彼は、あたかも人類愛の使徒もしくは殉教者を、われわれに思い起させる」(Иван Странник, Максим Горький, Критико-биографический этюд, перевод с французского Н. Васина, 1903, с. 37-38)

に。だからゴーリキイは、過去の轍を踏襲することなく、一方的に理念を現実に対置することなく、理念と現実の融和の接点を探りつつ、理性的なものと生活における自然成長的なものの合致を追求したのである。ゴーリキイは書いている。「人民の自然成長性からのインテリゲンツィヤ——理性的本源としての——の精神的孤立の不安な感覚は、一生涯、多かれ少なかれ執拗に私を追求した。私の文学的労作のうちで、私は一度ならずこのテーマに触れた。『私の道づれ』その他の物語はこれによって生れたのである。この感覚は次第に大破綻の予感に変わっていった（中略）もしも意志と理性との分離が個人の生活において苦しいドラマであるとするならば、——人民の生活においてこの分離は悲劇である」（XV, 81）

『わたしの道づれ』における海の情景は、理性的本源と自然成長的本源の葛藤を象徴するものようである。

「海は力強い動きにみちた、広大な生活を生きていた」「白いたてがみをうち振りながら、先頭の波が岸边にその胸をどすんとぶっつける、そして岸にはね返されて引きさがると、彼らの応援にかけつけてきた他の波と出くわす。泡と飛沫のなかでしっかり抱き合っ、彼らはまた岸边にうち寄せ、自分の生活の場を押しひろげようとする。水平線から岸边までの全海面にわたって、これらのしなやかな、力強い波が生れ、たがいにひとつの目的のためにしっかりと結び合い、緊密な集団となってたえず進んでいた」「この水の集団の運動のなかでは、どの一滴の水も無意味に消え去ることはなかった。その集団は何かある意識的な目的に力づけられていて、実際にこうして——その広大な、律動的な打撃によって、その目的を達しているかのようだった。黙々たる岸边に憤然とおどりかかってゆく先頭の波の美しい勇氣は魅力的だった。そしてそれらの波につづいて、太陽の光りで虹の七彩にいろどられ、その美と力の意識にみちた力強い海が、海全体が静かに、仲よく進んでくるのを見るのは快かった」（I, 439. 傍点筆者）

この表象はロマンチック伝説と照応する。

ラギムのうたう『鷹の歌』(1895)のなかには、みすぼらしい現実の低さから理想の高みへと飛翔せよという呼びかけが高鳴り、「神と予言者」の掟に従って「天国」へ至る道よりも、自由と幸福を自力で獲得するための闘いの道を選ぶ「雄々しきものの狂気」が讃えられる。この歌のなかに、語り手は自分の探求の回答を見ようとする。——ラギムの歌と、鷹の勇気への讃歌を唱和する海とは、語り手の魂を詩的和音でみたし、紺碧の空にかかる星の織物は「魂を魅するような、ある啓示に対する甘美な期待で頭をかき乱すような」(I, 485)、荘厳な歌声として彼に感得される。鷹の偉業は、語り手のなかに、人間の全能の信仰を、世界に対する英雄的な態度の結果として地上のあらゆる謎を解き明かし、それ自身が星となる人間の無限の可能性の信頼を生み出す。この作品のむすびの文章はそのように読まれるべきであろう。

「すべてのものがまどろんでいる。だがそれは浅いまどろみ方で、すぐ次ぎの瞬間にはすべてのものがはっと目を覚まして、得もいえぬ甘美な楽の音の整然たる調和のうちに響きを発するように見える。それらの楽の音は世界の神秘について物語り、それらは知恵に向かって解き明かし、そのあとで幻の火のように知恵をかき消すであろう。そして魂を高く紺碧の深淵と誘い去るであろう。そこからは、魂を迎え入れるように、胸がわくわくするような綺羅星がやはりたえなる啓示の音楽をもって響き始めるだろう……」(I, 486)

民衆の数世紀来の宿願をマクシムに語るのはイゼルギリである。「彼女の軌むような声は、すべての忘れられた時代が、彼女の胸のなかに凝りかたまって思い出の亡霊と化し、不平をこぼしているかのように響いた」(I, 339)。語り手はモルダヴィヤ人たちと一緒に、葡萄畑が働いている。若くて力がある彼はなぜか、仲間を避け、労働のあとの気晴らしにも加わらない。イゼルギリは彼を、陰気で、孤独で、極端に空想的で、しかも勤労する人間

に不信感をもっているとして非難する。彼女は彼に、人々の相互の理解と支持に根ざす、生活に対する英雄的な態度の必要性という思想を吹きこむ。彼女が語るジプシー伝説は、力ずよい人間の二つのタイプを明らかにする、——鷲の息子ラルラの伝説は孤独な力の讚美者、自我崇拜的個人主義者の悲劇であり、ダンコの伝説は勤労人民の希求、必要、使命の一体感に根ざす社会的義務の理念、集団主義の理念の讚美である。ダンコの伝説は語り手に、世界についてのこれまでの観念を再検討し、「永遠の」課題から「現実の」課題へ立ち向かうことを要求する。そして、ダンコについて話しはじめる前に、イゼルギリが「強い人や美しい人が生活を逃れてどこかへかくれてしまった」(I, 358) と思い憂えたように、話の終わったあとで、語り手は、彼の時代の最も悩ましい諸問題に思いをはせるのである。「私は彼女を眺めながら考えた、——まだどれほど多くのお伽話や思い出が彼女の記憶のなかに残っていることだろうか? と。そして、ダンコの偉大な燃える心臓と、これほど多くの美しい、力強い伝説を創った人間の創造力を、英雄たちと巨大な事件がそこに存在した古い時代を、そしてすべてに冷淡な嘲笑を向ける冷たい不信に満ちみちた悲しい時代——死せる心臓をもって生まれてきた虚弱な人々の、哀れむべき時代を思うのであった……」⁽⁷⁾(傍点筆者)

引用した語り手の述懐のうち、イゼルギリの後向きの哀惜にびたりと照応する傍点の箇所は、ずっと後になって作者によって削除された。この削除は、ゴーリキイが語り手とモルダヴィヤ人の相互関係を新たに意味づけ、作家自身が現実の諸関係の矛盾を解決する基本的な力の存在を確認した結果、語り手を社会的不信や過度な空想癖から解放したことによる。

その当初において濃厚であった「活字崇拜」と孤立的気分を克服しつつ、語り手は集団主義と抽象的ヒューマニズムを峻別し、社会と集団とを混同せずに見定める。不慮の災難で息子を失って、悲しみに打ちのめされた女(『コ

(7) М. Горький. Очерки и рассказы, т. 2. СПб., 1898. с. 321~322.

ーリュシャ』, 1895), 生活に痛めつけられ, 恋人に捨てられて絶望に悶える
ナターシャ (『ある秋のこと』, 1895), 自分の妻に残酷な制裁を加える百姓
(『決着』, 1895) との出会い, 亡くなった婦人革命家の 供養のために国じゅ
うを徒歩で遍歴する老人たちとの対話 (『こがーらな女! ……』, 1895) ——
こうしたすべては, 既存の社会体制と生活の人間に対する関係のきびしさを
一層深く, 語り手に意識させる。

民衆が耐え忍んでいる状況の重苦しさを深く知れば知るほどに, ますます
強く語り手は, それでもやはり人間的でありうる人々の底知れぬ強さに驚嘆
させられるのである。彼は人々への不信から次第に解放される。

あたかも, 語り手の数年にわたる探求に対する, 最終的なそれではない
が, 一応の総計を行なうかのように, ゴーリキイは, 記録小説『コノヴァー
ロフ』(1897)において, 以前の諸作品におけるよりもはるかに詳細に, 語
り手について取り上げている。ここでは語り手の形象は, 断面ではなく形成
過程において示され, 彼とコノヴァーロフの相互関係を通じて明らかにされ
る。

マクシムとコノヴァーロフの出会いは, マクシムが18才であって, パン焼き
の見習として働いていたときだった。彼は旺盛な知識欲に燃える多読家であ
り, 生活に独自の, 強い関心を抱いている。彼には感傷は縁がなく, 人々の
もつ自己卑下や自虐の嗜好が理解できない。彼は繊細な心をもっていて, 女
性に対するコノヴァーロフの人間的な態度に——浮浪人に共通する虚無的な
それではなく, 幼児のような態度に感動し, コノヴァーロフが発揮する労働
の芸術的技術と労働のなかに喜悦を見出す能力に尊敬の念を抱く, なぜなら
マクシム自身が労働することに喜悦を見出す人間だから。

語り手は生活の諸現象についてさまざまに思いをめぐらし, 社会的諸問題
に関心を抱き, すべてを自分で会得して人々に説明したいと念願している。
彼の崇高な企図は, その表現のために説得的な言葉を見出すところまでは,
まで十分に成熟していない。しかし, それは疑いなく革命的な見解である。

情熱をこめて彼はコノヴァーロフに彼の生活の本質を説明する、しかし相手は彼の言葉を信じない。そこでマクシムは、コノヴァーロフに読み書きを教え、「自分がその頃知っていたすべてを彼に伝えよう」(■, 33)と決心する。彼は、どんなことをしてでも、コノヴァーロフを「自分の信念」に向き変えさせようと望む。この決心はしかし実現されずに終わった。パン焼きの名人は、ある夜泥酔したあげく、マクシムのもとに多くの謎を残したまま、忽然と町から姿を消した。

数年を経て、ロシア遍歴の道にあるマクシムは、とある護岸工事の人足たちのあいだに、かつての友人を見出す。ふたたびめぐり会ったコノヴァーロフは、マクシムの心にはもはや、無意味に減んでゆく人間の魂に対する哀惜以外に、何ものをもよび起しはしない。彼にとってコノヴァーロフは「ぶすぶすいぶりながら灰になろうとする炭」のように思える。マクシムは彼のなかに、敏感な心と叛逆的な魂をもって生れるという不幸を担わされた数知れぬロシアの人々の代表者を見るのである。生活は彼を以前に住みついていた所から引き剥がし、その旋風のなかに捲きこむ。だが彼の理性は盲いている。だからコノヴァーロフは、自分の魂の力を無益に浪費しながら、目的もなく地上をさまようのである。生活によって導き出された枠には入りきらず、他の生活を探してはそれに適合しようと試みるのだが、結局、彼は「何処に行っても、人間のいるところはあるしねえ」(■, 53)と嘆息する。コノヴァーロフの生涯は、監獄での縊死によって幕が閉じられる。

コノヴァーロフの自殺は語り手に数々の解きあかすべき謎を与えた。コノヴァーロフは一面では、「永遠の自由を憧憬」する典型的な浮浪人である。しかし他面では、労働を愛し、教養のある人間を尊敬し、女性にいたわりの態度を示すやさしい心の持主であり、正義に対する情熱を潜めていて、農民叛乱の指導者ラージンに共鳴する力強い個性でもある。彼の心のうちには、世の中の不合理と個性の圧迫に対する反抗が、本能的にはあるが、かすかに目覚めている。彼は地上に「今とちがった秩序」が必要だということも、

漠然とながら、意識していた。しかしコノヴァーロフは「秩序」を創造する力を信じない。いや、むしろ、自分のような存在をこの世から絶滅するために「秩序」が必要だと考えるのである。既存体制の圧力のもとで、自分が生来的に所有していたはずの人間的魅力を削り取られながら、彼は、すべての不幸を彼自身の罪によるものと考え、底知れぬ「自己不信」に落ち込んでゆく。人間が労働の主人ではなくて奴隷であるならば、彼が所有する大きな労働能力も技術も彼にはその価値が認識できないのである。こうして、マクシムの前に、コノヴァーロフの死は人間の尊厳と労働の意義についての課題を残す。

その生命の法則に目をふさいですべての不幸を、災厄を甘受する運命に従順な無抵抗主義と同じように、すべてを環境と境遇の責任に転化するペシミズムもまた、自分と他の人々の魂を滅ぼしてゆく。愚痴と不平と泣言で世界を汚す存在もまた、人間性の敵として厳しく排除しなければならない。語り手は、必要な時には、苦痛を耐え、沈黙を守るべきことを知る。小品『初めて私はこの婦人を見た……』(1897)は語り手の行程における重要な段階を示すものである。

ゴーリキイの遺稿のなかから発見されて、1946年になってから『文学新聞』に初めて発表されたこの作品は、形式からいえば邦文にして400字詰原稿用紙10枚足らずの掌篇にすぎないが、初期創作の語り手の女性観を示すものとしてもきわめて興味深い内容を含んでいる。

海の描写は、すでに見てきたように、ゴーリキイの最も好む人間の行動と心理の背景であるが、この作品でも海という壮大な背景の上に、ヒロインの姿が浮かびあがる。作者は、わずかな、抑制された言葉で、ロシア女性のすばらしい形象を微妙に、的確に描き出している。作者はあたかも海辺の灰色の巨巖のあいだに、大理石を彫って女人像を塑像しているようである。それは古代ギリシャの古典的彫刻を思い出させる。語り手自身もこのことを意識しつつ、ヒロインとの邂逅を物語っているようである。棺のあとに行く彼女

を彼は初めて見る。「黒い雲のような喪章のプラトークが均整のとれた、背の高い彼女の頭から背中へと垂れさがり、美しい線を描く唇はきゅっと閉ざされていた。彼女の——大理石のような——顔には黒い瞳が乾いたように燃えていた、彼女の全体が誇らかな苦痛の化身のように私には思えた」(■, 322)

語り手は海辺で彼女にふたたび出会う。海の彼方を眺めながら、巖のあいだに「彫像のように、微動もせず」彼女が坐っている。作者はヒロインの容姿を「背の高い」、「均整のとれた」、「しなやかな」、「力強い」と形容し、彼女の眼に特別の注意を向けている。「誇らかな」、「悲しげに黒い」彼女の眼はほとんど常に茫漠たる海に向けられ、その視線のなかには深い思考、大いなる期待と希望が輝やいている。彼女の視線が向けられている「海の彼方」には、陽気な、勇敢な、新しい波が生れて、岸に泳ぎ寄っては灰色の巖に歓声と歌声とをあげて、勢いよくぶつかる。ここからヒロインの内面の叙述へと移行する。彼女はこの人生のなかで「灰色の巖」に立ち向かう人間を求めている。彼女は期待し、幻滅し、ふたたび期待する。幻滅は過去の世代に、期待は新しい世代に——過去の無力感、エゴイズム、個人的苦痛の誇張癖に囚われず、苦痛に抵抗し苦痛を乗り越えようとする人々に向けられる。人間は、彼女の見解によれば、雄々しい闘士でなければならぬ、周囲の人々の精神的健康を配慮し、自分の個人的苦痛を耐えて共通の幸福の追求へと向かわなければならない。彼女は語る——「人間を尊敬するものは、自分のことは口に出してはいけません。わたしたちの個人的な災厄の重苦しい形で人々を中毒させるような悪質な権利を、誰がわたしたちに与えたでしょうか？ 古代には、死に瀕した負傷者は、自分の呻き声で敵に意地の悪い喜びを与えまいとして、誇らかに沈黙を守ったものです……なのにわたしたちは、歯が痛むときでさえ、哀れっぽい叫び声で全世界をつんぼにしていまいそうです。わたしたちにはおおらかな沈黙は無縁なのでしょうか……わたしの悲哀は、多分——わたしの死に至る病いなのかも知れません……しかし、

人々はしばしば貧慾と不節制のために病気になり、死んでゆくのです……わたしはあの人たちを気の毒とは思いません」しばらく沈黙して、彼女は低い、しかし耳を傾けずにはいられない声で言った。「人々がもっと誇り高いものであってほしいですわ……もしもわたくしが魔法使だったなら、生まれてくる子供みんなに、おおらかな沈黙をつけ加えてやったでしょう」(■, 324)

この考えは語り手にとっても貴重であり、親近である。彼もまた「自分の心のなかで少なからぬ人々を葬った」。彼は孤独の苦しみを体験し、それが時には「旱魃が大地を衰弱させるように、心を衰弱させる」(■, 323) ことを知っている。そして彼は、それがどんなに些細なことであっても不幸に見舞われた人に無関心ではありえず、ただちに助けに馳せつけた。その結果、地上には彼と同じような希求を抱く人がいることを知り、彼は心のうちに「燃えるような創造的な光」を感じたのである。

『コノヴァーロフ』と『初めて私はこの婦人を見た……』に始まって、語り手は生活のなかにある明るい要素をますます多く発見し、大きな社会的性格をもつ諸問題に深く取組んでゆく。

短編『オルロフ夫婦』(1897)において、語り手は自身の見解を述べるだけでなく、短編の構成が物語るように、この見解を客観化している。マクシムが作中に直接姿を現わすのは結末の部分だけであって、彼とグリーシカ・オルロフの対話によって、この物語の総括がなされる。オルロフ夫婦の悲劇の原因を把握することによって、語り手は、階級社会の諸々の背徳の根本的原因の認識——人間の生命力の本質であるところの労働がこの社会においていかに本来の意義を失いつつあるかという認識に到達する。人間が自分の労働の無意義という考えに捕えられているという結論を前に、マクシムは悲痛な気持をもって立ち止まる。だが、人々が自分のためにではなく、ひと握りの寄食者と搾取者のために働き、労働が社会的事業ではなくて個人的事業で

あるかぎり、ほかの結論はあり得ない。彼の見解によれば、生活の全体制が人間を野獣に変え、私慾なき人間愛に富む若者を浮浪者に、飲んだくれ、人間嫌いに変えてしまうのだ。かくて、「私がオルロフと一緒に坐っていた酒場の重い扉は、ひっきりなしに開けられ、その都度、淫蕩な軌音をたてた。そして酒場の内部は、貧しいロシヤの人々を、落着きのない人々を、ゆっくりと、だが避けがたく、次から次へと呑み込む、大きな口腔を思わせるのであった……」(V, 176) という語り手のむすびの言葉は、オルロフの運命に普遍的な、一般的な意味を与えて、戦慄的に迫ってくるのである。

下層社会が自分の潜在力に出口を与える道を発見できずに苦悶しているとすれば、上層社会は内部分裂を惹き起しつつ、自分が創り出した腐敗菌に中毒していた。そしてこの階層が本質的に所有する寄生虫的掠奪者の性格は、その末端の代表者たる地方の郡長や商人ママエフを通じて(『キリールカ』1899)、あるいはこの階級の脱落者プロムトフを通じて(『ペテン師』, 1899)、語り手によって鋭く摘発された。上層社会はすでに自分の力で自己の階級の腐敗を浄化する力を喪失していた。

語り手の階級的連帯の意識の形成を示すものは『二十六人と一人の女』(1899)である。奴隷的労働に耐え、25人の他のパン焼き職人たちとともに懲役に等しい生活をすごし、「主人たち」への憎悪において仲間と心をつにしながら、彼は自分のなかに、働くものの幸福な未来を確信する叙事詩をうたい上げる力を発見する。ここでは妥協の余地のないものとして、「主人たち」の搾取に対する労働者の集団的抗議の胎動が意味づけられている。

26人の「囚人たち」のその後の運命については明らかでないが、その一人である語り手の姿は『盲人の歌』(1901)において見ることができる。町はずれを散策していた彼は、居酒屋に立ち寄って、その静けさをいぶかる。人々が何か重大な問題について話していた。

「それで、つまり、わしらの故郷じゃ白楊の木が、あんたらのこと違って、聖像のお供えの蠟燭みたいにまっすぐだがな……わしらの故郷じゃ何

もかも別で、何もかもやさしそうでな……ただ貧乏だけはここと同じだよ」
《貧乏はどこでも同じさね……》」「《どこへ行っても、故郷くにさいると同じで、
人間にとっちゃ良いことはねえ……》《貧乏人にとっちゃ——パンのあると
こが故郷だわな……》」(Ⅴ, 315~316) 19世紀の末において急速に農村に
浸透していった新しい経済関係は、以前でさえも恒常的な飢餓にさらされて
いた貧農層の生活基盤を破壊し、農民を農村から都会へと追い立てる。しか
し、都会で彼らを待っているのは、都会の片隅にしみのようにへばりつく貧
民街の絶望ばかりである。

この短編のなかで、民衆の苦悩について一人の女が語っている。彼女を苦
しめるのは生れ故郷へ寄せる憂愁であり、それ以上に——生活によって壁に
押しつけられた人間の悲哀である。だから彼女は、故郷の白楊に思いを馳せ
ながら、盲人についての歌を、光と労働の可能性を奪われた人々の歌をうた
うのだ、太陽を見ることのできない者は喜びを見ることができない、と。語
り手は次のように述べている。「私のなかにこの歌は奇妙な、大きな、怖ろし
い感情をよび覚ました。私にはすべての人が哀れであった——盲人も、目あ
きも、自分自身も——私の生活のなかに私が見て来たことのすべて故に。同
じように何かについて歌いたかった、そして、大地から遠ざかってゆく太陽
の深紅の輝やきを天上に眺めながら、私は不安にかられて思うのだった——
また昇るだろうか？ と……そして更に、別の、やはり奇妙な考えが頭に浮
かんだ。この耐えがたく悲しい歌声が私の体のなかで慄えるように思え、そ
して私には、まるでまわりのすべてを捕えつくし、居酒屋にいるすべての人
々の涕泣のように響くこの歌のほかに、なんの音も聞えなかった」(Ⅴ, 320)

このように、語り手はすべての人々の運命に対する責任を意識する。盲人
についての歌を聞きながら、彼は「大きな、怖ろしい感情」を体験し、自分
の前に彼が見てきたすべての、「闇に捕えられた」すべての人々の記憶を蘇
えらせる。広大なロシアの地では、同一種の樹木さえ北と南、東と西では形
がちがうのに、貧困は到るところに同一である。人々はこの国の端から端へ

と駈けめぐって、光明を、労働の場を求めている。太陽は彼らの上に昇るだろうか？ 故郷を失った貧しい女が、その美しさを讃えるウクライナの白楊のように、「まっすぐに、誇らしげに……空へ向かって」彼らは立ち上るだろうか？ 人々がかくも渴望する昇る太陽へ向かう道は、どこにあるのか？ 「教えよ！」と、読者は語り手に要求する（『読者』1899年発表）。「話してくれ！」と人々が期待する。これらの要求と期待に語り手は何をもって答えることができるのか？ 彼は答を持っているのだろうか？ この短編は次の言葉で終る。——「私はどんどん遠くへ歩いて行った。私の前方には夕焼けが消えかけていた。そして、私の胸のなかに、うつろなこだまが鳴りつづいている。

ひとみは盲い、心も盲い……

たあーすけたあーまえ、信ずる者を……」（V, 321）

『盲人の歌』の語り手の長い、苦悩に満ちた生活探求の結実として人々の前に与える回答が、自分の幸福の獲得のために決定的闘争へと人々に呼びかけ、勤労する人々のすでに始まった未来の形象である「人間の壮大な姿」である。叙事詩『人間』（1904）の主人公——「誇り高く自由な」「悲劇的に美しい人間」は、語り手の理想であるばかりでなく、語り手がその理想のなかに溶けこみ、多くの、不正と闘う「反逆の」人々によって集大成されるところの集団的な、大文字で書かれる人間である。⁽⁸⁾——この総括を導き出すために、語り手はどれほどの幻想を打ち砕かれ、どれほどの苦悩、幻滅、試行錯誤を体験しなければならなかったことか！

『人間』の発端における語り手の述懐は深い意味がこめられている。語り手は、工場プロレタリアートとは異なる複雑な道を通して、革命の道に到達した。彼の前には「永遠の自由を憧憬する」浮浪人の道も、資本主義の機構のなかの有能な歯車の道も、現実に背を向けて「永遠の課題」に取り組む流行

(8) 拙稿「叙事詩『人間』について」参照、「小樽商科大学創立五十周年記念論文集」所収。

作家の道も開かれていた。しかし、人間の尊厳を信じ、人間の労働の価値を認識する彼は、人間を畸型化し、労働の価値を低める現実に妥協し、あるいは目をそむけることはできなかった。かくして、語り手は、人間の尊厳を取り戻し、労働の価値を正しく位置づけるために既存体制を打破し、改造しようと立ち上りつつあったプロレタリアートの闘いの道に合流する。

語り手の道はゴーリキイ自身の道でもある。後になって、ゴーリキイは、人間と労働の関係についてこう述べている。

「私にとっては、人間のほかに^{イデア}観念は存在しない。私にとっては、まさに人間こそ、そして人間だけがあらゆる事物およびあらゆる観念の創造者であり、人間こそ奇蹟をおこなう者、そして未来におけるすべての自然力の支配者なのである。われわれの全世界における最もすばらしいものは、労働によって、聡明な人間の手によって作られたものであり、すべてのわれわれの思想、すべての観念は労働の過程から発生する」「もし《神聖なもの》について述べる必要があるとするならば、自分自身にたいする人間の不満と、彼が現在あるよりは良いものになるとうとする希求のみが神聖である。人間自身によってつくり出されたあらゆる現世のがらくたにたいする彼の嫌悪が神聖なのである。地上から嫉妬、貧慾、犯罪、疾病、戦争、そして人間のあいだのあらゆる敵意を絶滅したいという人間の欲求が神聖であり、人間の労働が神聖なのである」⁽⁹⁾——正に、ゴーリキイ文学の心髓を語る言葉である。

×

×

ゴーリキイの初期創作における語り手の形象は、以上見てきたように、労働によって生きる人民が自己のなかに、生活刷新の歴史的使命を認識し、この課題を解決する道を探求してゆく過程を示す芸術的形象である。自己認識の過程は、生活現実における自己の状態の解明を通じて発展し、自己認識

(9) 除村吉太郎他編「ゴーリキイの文学論」61～62頁。

は、既存の社会体制の諸矛盾の正確な把握において、搾取社会に根をはる諸々の先入見からの自己の意識の解放において確立される。既存社会のすべての階級、すべての階層に対する自己の関係を規定しつつ、語り手は、自分を、全勤労人民の幸福をたたかい取る闘士として、大文字で書く人間の理念の担い手として意識する。この理念の現実化は、人々から、生活の全面的改造のための不撓不屈の闘いを要求する。

語り手の行程は、それ自体としては作家の自伝的要素を濃厚に帯びた独自の行程でありながら、しかし、それは同時に、勤労人民の多くに、なかんずく民衆のなかから生い育ってきた新しい知性に共通する行程であり、19世紀の末から20世紀初頭、第一次ロシア革命前夜に至る激動期を背景とする、ロシア人民の知性発達の典型的なものである。